

あなたは私の誇り

清 心

(訳 横田勤)

ステファンは寄宿している中学校から帰って来た。風に吹かれてしわくちゃになった秋の葉のように、しょんぼりして元気がない。食事の時、クリスティンは特別に彼が大好きなビーフステーキとピザパイを作った。普段なら喜びに目を輝かせ、学校で起こった面白いことを話しながら、あっという間に目の前のおいしい料理を平らげてしまうところだ。だが、今日の食卓はなんと静まり返っていることか。心配事を抱えている彼は、ただ申しわけ程度にちょっとだけ食べて、そっとナイフとフォークを置くと、何も言わずに寝室に引きこもってしまった。

ぴったりと閉じられたドアをながめながら、クリスティンはふとこころにウサギを隠しているように、気がもめて心が休まらない。先生に叱られたのだろうか？ 同級生と悶着を起こしたのだろうか？ 解決できないような何かの問題に出くわしたのだろうか？ 彼女の視線の中に少しばかり焦燥感と困惑が浮かび、一時的に道に迷っている子供のようにであった。

ステファンは父親ニールが亡くなってから生まれた子供だった。妻が妊娠六ヶ月の時に、突発性心筋梗塞で父親はこの世を去った。そのときのクリスティンは、震度九の地震に遭遇して人生がたちどころに崩壊したような状況に陥った。眠れぬ夜、彼女は何度も夫の名を呼び続けた。しかし目の前にあるのは、空虚な部屋だけだった。それらの限りのない悲しみを、ステファンが付き添ってくれたおかげで、彼女は耐え忍ぶことができた。彼がお腹の中にいる時は、昼夜分かたず拳で殴ったり足で蹴ったりして、外に出てくるのを待ち切れずに彼女に「ママ、怖がらないで。あなたには僕がいるよ」と訴えているようだった。あふれる涙で顔を濡らしていたクリスティンがお腹のまん丸くなったところを優しく撫でると、心はまるでかまどから出したばかりのパンのようにだんだんと暖かくなり、柔らかくなっていった。

父親がいなかったことがその理由なのかもしれないが、ステファンは小さい時

から非常に物分かりが良く、いざこざを起こす事がほとんどなかった。我慢強く、寛容で、人との付き合いも細かなことにはこだわらない性格だった。だが、今日はどうしたというのだろうか？ いったい何が原因で、今までずっと朗らかだったステファンが浮かぬ顔をしているのだろうか？ クリスティンの心は、水に浸した海綿のように下に沈んでしまっていた。

この時、電話のベルが鳴った。学校の理事会から、一度学校に来てくれるようにという内容だった。

クリスティンは不安になって尋ねた。「すみませんが、いったい何があったのでしょうか？」冷たい返事が返ってきた。「ステファンが問題を起こしたのです。あなたに話していないのですか？」

金曜日の社会科学の授業の時のことだった。ある同級生が教室のドアのかまちの上に、顔料が詰まった風船を置いた。そして、ふだんからみんなに嫌われているガリル先生が、事情を知らないままドアを開けて入って来た時、事前に準備してあった注射針がうまい具合に風船に刺さって風船が割れた……当然のことながら、ガリル先生は頭から足まで全身が、カラフルな色のついたぬれねずみになった。しかし彼をこの上なく怒らせたのは、生徒たちがうれしくてたまらなくなり、まるでオリンピックの金メダルをとるよりも痛快だというふうに拍手を送ったことである。

ステファンはその目撃者として巻き添えを食らったのだ。実際には見ていたのは彼一人ではなかった。しかしどういうわけだか、最後になって、教師と学生の委員会はただステファンだけを繰り返し攻撃したのである。彼らはステファンに言った。もし彼がひどいいたずらをした者の名を言わなければ、たいへん残念だが、学籍を除名されるだろう。

理事会の詰問に対してステファンは始終ただこう答えた。「言うことはありません。」彼はクリスティンに言った。「ママ、もし僕がやったのなら、僕は絶対に立ち上がって認めるよ。でも、他の者がやったことだ。でも、もし僕が彼らの名前を言えば、それは裏切りで、密告することになる。僕はそのような人間にはなりたくないんだ」

クリスティンは尋ねた。「彼らはあなたの友達なの？」

ステファンは首を横に振り、少しばかり苦笑して言った。「まったく逆だよ。普段はいつも、僕はパパに守ってもらえない可哀そうな奴だとからかっている」

クリスティンはまた尋ねた。「それなのに、あなたはどのように彼らの事を言わなかったの？ あなたのせいではなく、彼ら自身が間違っただけなのよ」

ステファンはまた首を横に振り、しっかりと彼女を見て言った。「ママ、正しかろうと間違っていようと、それはすべて彼らの事なんだ。だけど他人を裏切るか裏切らないかは僕自身の事なんだ。僕に分かっているのは、僕はそのような人間にはなりたくない、ということなんだ」

クリスティンの心はすぐに柔らかくなった。彼女は息子の事が理解できたと感じた。彼女は彼の肩を軽く叩いて言った。「ちょっと学校へ行って来るわ」

ステファンはそっと母親を抱きしめて言った。「ありがとう、大好きだよ、ママ」

ゆっくり行こうとしていた母親の姿を見ながら、ステファンはまた言った。「校長先生は、もし僕が彼らの名前を言えば、僕をオックスフォード大学に推薦するのを認めるとも言ったんだよ」

クリスティンは振り向いて微笑みながら彼を見た。まさにドアを閉めようとした時、ステファンの怯えた声が聞こえた。「もし僕が退学になったら、転校の手続きをしてくれる？」

クリスティンは目じりからあふれ出るなみだを拭いてリズムカルに答えた。「当然よ。でも、必ずこの学校で勉強を続けられると思っているわよ。もう一つ、ベイビー、ママが言いたいのは、あなたは私の誇りだ、ってということよ」

ステファンは笑った。太陽の光がさんさんとドアから射し込み、目の前には鮮やかな花が咲いていた。

クリスティンは校長を訪ねて行った。半時間後、彼女は頭をあげ胸を張って出て来た。翌日、教師と学生の委員会は、目撃者としてのステファンは、何の責任も負う必要がないと発表した。

実は、クリスティンは校長に三つの質問を提出していたのだ。一つ目は、「ひどいはずらをステファンがやったわけではないのに、どうして他人の過ちのために彼に懲罰を与えるのですか？」二つ目は、「ステファンは、自分の将来が有利になることを分かっても、同級生を裏切るような行為をしなかった。これは非常に正直でしかも賞賛に値する勇気であるとは思わないのですか？」三つめは、「ステファンは人生の十字路にいて、極めて少数の人間だけが歩む正しい道を選択したのに、私達が彼を大事にもせず護りもせず、それでいて彼にずっときれい

な心を持っていると言えるのですか？」というものだった。最後に、クリスティンは学校の役員会に願った。「ステファンの正直さと勇気を砕かないでください。どうか彼を、ずっと一人の母親の誇りとなる、学校の誇りとなる人間でいさせて下さい」

母親のことばを聞き終わり、ステファンはしっかりとクリスティンを抱きしめた。彼は母親の耳元にかがみ込み、誇りに思い、感動して言った。「ママ、わかっている？ ママもぼくの誇りなんだよ！」

(『中国微型小説排行榜 2011 年』百花洲文芸出版社，南昌市，2012，pp. 77-79.)



(中国語原文) **你是我的骄傲** 清 心

史蒂芬从寄宿中学回来，如同一枚被风吹皱的秋叶，看上去无精打采。吃饭时，克里斯汀特意做了他最喜欢的烤牛排和意大利馅饼。若是往常，他会一边眉飞色舞地聊学校里发生的趣事，一边风卷残云般将眼前的美食裹入腹中。只是，今天的餐桌却静悄悄地。心事重重的他，只象征性地吃了一点儿，就轻轻放下刀叉，默默地躲到卧室去了。

望着那扇紧闭的门，克里斯汀怀里像揣了兔子，非常忐忑不安。儿子被老师批评了？与同学闹别扭了？碰到什么难以解决的问题了？她的目光，闪过星星点点的焦虑和迷茫，一时像个迷路的孩子。

史蒂芬是遗腹子。他的父亲尼尔，在妻子怀孕六个月时，突发心肌梗塞去世了。当时，克里斯汀似遭遇九级强震，人生顷刻天塌地陷。不眠之夜，她一声接一声呼唤丈夫的名字，然而，呈现在眼前的，却只有一屋子的空荡。那些漫无边际的悲伤，是史蒂芬陪她挨过去的。他在她的肚子里，不分昼夜地拳打脚踢，似在迫不及待地告诉她：妈妈，别怕，你还有我呢。泪流满面的克里斯汀，温情地抚摸着腹部那块圆圆的凸起，一颗心如同刚刚出炉的面包，渐渐暖了，也软了。

也许是没有父亲的缘故，史蒂芬自小非常懂事，极少惹是生非。他性格隐忍宽容，与人交往亦从不斤斤计较。然而，今天他到底怎么了？究竟是什么

么原因，使一向乐观的史蒂芬变得愁眉苦脸呢？ 克里斯汀的心，像浸了水的海绵，满满地下沉着。

这时，电话铃响了，学校董事会让她去一趟。

克里斯汀惴惴不安地问：“请问是什么事？” 那端冷冷地答：“史蒂芬惹祸了，他没告诉你吗？”

原来，周五的“社会科学”课上，有同学在教室的门楣上放了一只装满颜料的气球。接下来，不知情的加利尔——这个素来令大家讨厌的老师推门而入时，事先准备好的注射器针头，恰巧刺破了气球……理所当然地，加利尔彻头彻尾变成一只五彩缤纷的落汤鸡。然而，更令他无比愤怒的是，同学们乐不可支的热烈掌声，简直比得了奥运金牌还要大快人心。

史蒂芬是作为目击者被牵连进去的。其实，看到的人不止他一个，但，不知何做，到了最后，师生委员会只对史蒂芬进行轮番轰炸。他们告诉史蒂芬，如果他不说出恶作剧的制造者，那么很遗憾，他只能被开除学籍。

面对董事会的逼问，史蒂芬始终只回答了四个字：无可奉告。他对克里斯汀说：“妈妈，如果是我做的，我一定会站出来承认。但，那是别人做的。如果我说出那些人的名字，就是背叛，就是告密。我不想成为那样的人。”

克里斯汀问：“他们是你的朋友吗？”

史蒂芬摇头，略略苦笑道：“恰恰相反，平时，他们常常取笑我，说我是没有爸爸保护的可怜的家伙。”

克里斯汀又问：“既然这样，你为什么不说出他们呢？这不怪你，是他们自己做了错事。”

史蒂芬再次摇头，目光坚定地说：“妈妈，无论对还是错，都是他们的事。但，是否一定要做个出卖别人的人，却是我自己的事。我只知道，我不想做那样的人。”

克里斯汀的心，软软地动了一下。她觉得，自己有些明白儿子了。她拍了拍他的肩，说：“我去一趟学校。” 史蒂芬轻轻与母亲拥抱，说：“谢谢你，亲爱的妈妈。”

望着渐渐走远的母亲，史蒂芬又说：“校长还作出承诺，如果我说出那些人的名字，他将提名并保送我上牛津大学。”

克里斯汀转过身，微笑着望着他。正欲关门，听到了史蒂芬怯怯的声音：“如果我被开除了，你能帮我办理转学手续吗？”

克里斯汀擦了擦眼角溢出的泪，语气铿锵地答：“当然，亲爱的。不过，我想，你一定还能在这所学校继续就读的。另外，宝贝，妈妈想对你说，你是我的骄傲呢。”

史蒂芬笑了。

大片的阳光自门射入，在眼前灿烂地开成花。

克里斯汀找到校长。半小时后，她昂首挺胸地走了出来。第二天，师生委员会宣布，作为目击者，史蒂芬不需再为此事负责。

原来，克里斯汀向校长提出了三个问题。第一，恶作剧并非史蒂芬制造，为什么让他为别人的错误受惩罚？第二，史蒂芬没有为了自己的前程出卖同学，你不觉得，这是非常正直并且可贵的勇气吗？第三，史蒂芬在人生的十字路口，选择了只有极少数人才走的、正确的那条道路，难道，我们不该尊重他、保护他，让他一直拥有纯洁的灵魂吗？最后，克里斯汀恳请学校董事会，别毁掉史蒂芬的正直和勇敢，请让他，一直是一个母亲、一所学校的骄傲，好吗？

听完母亲的叙述，史蒂芬紧紧与克里斯汀拥抱。他俯在母亲耳边，自豪而感动地说：“妈妈，知道吗？你也是我的骄傲呢！”

